

第1章 金城学院中期計画 (2009年度～2014年度の6年間)

金城学院 理事長
野村 秋博



計画実施期間 【全】＝6年間 【前】＝期間前半 【後】＝期間後半

I キリスト教主義による全人教育の強化

全人的な教育に対する社会的要請に応えるためにも、歴史に培われた金城学院の個性を発揮するためにも、建学の精神の根幹であるキリスト教主義による全人教育を強化、推進する。

1. 校内礼拝の励行と地域教会との関係強化

(1) 礼拝の魅力化 【全】

若い感性が積極的に継続して参加したくなるような礼拝・チャペルアワーの魅力を研究し、創出する。

(2) キリスト教関係施設による地域貢献のあり方の調査・研究 【前】

地域社会に対して、学院のキリスト教関係施設を利用した貢献ができないか、あるいは何が求められているかを調査・研究し、実現に向けた努力を行う。

(3) 近隣教会への出席の推奨 【全】

地域社会との接触を増やすためにも、全人教育のためにも、日曜礼拝などで教会に出席することは重要な機会であると考え、学生・生徒に教会の所在地・連絡先などの積極的な紹介や出席の推奨を行う。

2. キリスト教教育の再構築

(1) 宗教教育の体制整備と陣容の確保 【前】

キリスト教主義による全人教育を日常的、具体的に実施するために、中核となる宗教教育者を増員し、直接的な教育や指導

がしやすい体制を整える。

(2) 関係諸団体・組織との連携の強化 【全】

日本キリスト教団、キリスト教学校教育同盟ほか関係諸団体との連携、情報共有、共同研究などを活性化し、教育内容の充実のために継続的に連携する。

(3) 宗教主事の機能・機構の見直し 【前】

キリスト教学の講義、各種宗教行事、全人教育、キリスト者の育成など、宗教主事の役割の重要性を再確認し、主事の部門所属のあり方の見直しも含め、実効的な機構をつくる。

3. ボランティア活動の活発化

(1) ボランティア活動の推奨、指導 【全】

神と人に奉仕する人材の養成は、キリスト教主義教育の根幹であることを再確認し、ボランティア活動に関する情報を積極的に提供するとともに、推奨、指導を行う。

(2) ボランティア活動の単位認定の研究 【前】

全人教育に直結するボランティア活動の重要性に鑑み、教養教育の一つとして単位認定することを研究・検討する。

II 学院の建学の精神を活かした女性教育の推進

ますます重要となっている女性の社会的活躍と影響力発揮のために、リーダーシップを持つ人材、幅広い教養と専門性を兼ね備えた人材の育成をさらに推進する。

1. 教育力の向上

(1) 教養教育の徹底 【全】

豊かな人間性を育むことがあらゆる教育の原点であることの再確認から、教養教育の有意義性を再認識した教育の徹底を行う。

(2) 女性専門教育の充実 【全】

学院がこれまで伝統として積み上げてきた女性教育の成果をさらに発展させるとともに、女性の能力や特性を活かせる新たな分野の研究を進め、女性専門教育の開発と充実に努める。また、大学院のあり方、社会人教育等について調査・研究をする。

(3) 教育のグローバル化・英語教育の徹底 【全】

グローバル化と同時に文化の多様性の理解と尊重を重視し、外国語教育、とりわけ英語教育を今まで以上に徹底、高度化して「英語教育の金城」という伝統をさらに磨き上げる。

(4) 魅力的な学部・学科の編成 【全】

社会の潜在ニーズや学生・生徒の夢、将来性などを多角的にとらえ、学院の研究・教育資源を活かしながら、次代を見据えた魅力ある学部・学科の編成を行う。

(5) 中・高・大連携の推進 【全】

高校への出前授業・大学模擬授業や大学の授業開放、高校と大学が共同で行う体験型の授業プログラム、大学生の中学・高校での支援活動など連携を推進する。

(6) 教育評価制度の確立と運用 【前】

PDCAは、進化と成果アップのために必須作業であることを理解し、教育活動の評価制度を確立し、適正に運用する。

2. 施設・設備の充実・整備

(1) エコ・環境に配慮したキャンパスづくり 【全】

「大学里山キャンパス構想」による、省エネ、省資源、自然エネルギーの活用など、里山の中にある学び舎を造り、実践的な環境教育を行う。

(2) 中・高キャンパスの整備 【前】

経年変化や老朽化が目立つ中・高キャンパスは、安全性と利便性、美化のためにも、徹底した環境整備を行う必要がある。歴史と伝統のある建物も多いので、景観に配慮した整備を行う。

(3) キャンパス美化 【全】

女性教育、全人教育のためにキャンパスの美化は重要な要素であることを再確認し、「美しいキャンパス全国第3位」という大学キャンパスの評価をさらに高めるよう、緑化や施設の清掃、良質な生活環境づくりを推進するとともに、それを幼・中・高にも展開する。

(4) 教育用設備の整備 【前】

学生・生徒の意向を受けて、教育に関わる設備・環境を細かく見直し、状況に応じた適切な整備を行う。

(5) キャンパスの保安体制の確立 【全】

開かれたキャンパスづくりのためには、保安体制の整備は必須であり、最大の責任でもある。犯罪抑制・事故防止のために先進的保安体制を確立する。

Ⅲ より具体性を伴った国際理解の充実

海外留学や留学生の受け入れ・交流を活発化し、より多くの学生・生徒が異文化に直接触れる機会を増やすことによって、現実的かつ具体的な国際理解を深める。

1. 海外関係校との関係強化

(1) 教員の共同研究の促進 【全】

協定校・提携校を中心とした海外関係校とのつながりを深め、教員の交流や共同研究を促進する。

(2) 留学生の派遣の促進 【全】

安全・安心と教育成果を重視し、学生・生徒・保護者に、留学に関する情報を広く提供して、積極的な派遣を展開する。

(3) 留学生の受入れ態勢の整備と

受入れ推進 【前】

受入れ態勢の整備を行うとともに、円滑な受入れを推進する。

2. 留学生との交流促進

(1) 交流の場づくり 【後】

留学生との交流が日常的にできる場、多くの学生・生徒が留学生とリラックスして交流できる機会を積極的に設ける。

(2) 国際交流センターの体制強化 【前】

国際交流センターの体制を強化し、留学情報提供・留学相談はもちろん、学内外での交流の場づくり、交流イベント等の企画・実施を促進する。

Ⅳ 健全経営の維持

少子化と悪化する経済環境の中で、学院が安定的に継続するための経営・財務についての研究、入学・入園者の確保、退学の防止活動を徹底し、健全経営による健全財政を維持する。

1. 的確な財政検証・予測と資金計画

(1) 各学校・園の規模最適化の研究 【全】

市場予測、受験生、入学・入園者の調査分析を仔細に行い、効率的な学部学科編成の研究を行うとともに、財政面での近未来予測と資金・人件費計画を的確に行う。なお、中・高に関しては、当面1学年8学級制とする。

(2) 外部資金・寄付金の導入と活用 【全】

社会的ニーズを先取りし、独自性を発揮できる研究テーマや新しい取組みを開発する。産学連携、地域連携も強化し、外部資金・寄付金等の積極的導入を図るとともに、その有効活用で研究の深化拡大につなげる。

(3) 資金の有効活用 【全】

資金は限りあるものと認識し、諸計画や事業は最小の資金で最大の効果を得ることを図り、有効性の追求に基づくものとする。また、調達に関しては、仕入先・発注先の見直しを常に行い、競争原理を働かせた合理的な運用などを行うものとする。

(4) 予算精度の向上と弾力的運用 【前】

経営計画の精度アップと適確な対応のために、部門別予算計上の精度向上をめざす。また、状況変化があった場合には、弾力的運用が可能な体制を整える。

(5) 部門別採算制の実施 【前】

学院の財政把握と問題点・改善点の発見のために、財政のあり方について部門別の採算性に注視し、部門単位の決算制度の運用研究を行う。

2. 組織力の向上

(1) 組織運営の合理化と責任体制の明確化 【全】

組織のありようを見直し、各部署の使命と責任を明確化して、整理・調整を行い、決裁制度を確立し、組織運営の効率化・合理化を図る。

(2) 人事・労務管理の適正化と人材の育成 【前】

管理者・職員の能力要件を明確化し、それに基づいた人材育成に努めるとともに、戦略に応じた人材の適性配置と、目標管理、人事考課を含めた人事・労務管理の適正化を図る。

(3) 業務管理の効率化 【全】

業務の見直しによる無駄の発見と排除に努め、ITの活用、アウトソーシングを含めた効率化を徹底する。

3. 入学・入園者の確保と退学者の防止

(1) 広報・宣伝体制の整備 【全】

常に到達度や表現内容、効果に対して客観的な評価検証を行い、幅広い視点で受験生増とブランド資産向上につながる積極的な広報・宣伝活動を展開する。

(2) 募集業務の徹底 【全】

「教職員全員が広報マン」という心構えで、熱意と誠意をもって募集業務にあたる。学校紹介イベント、体験イベント、訪問活動等も活発化させる。

(3) 在校生相談・指導窓口の充実 【前】

経済状況、社会状況の悪化に伴い、中途退学者が増加する可能性もあり、心理カウンセリングも含めて在校生相談・指導窓口を充実させる。

V 地域社会との共生

地域社会（広域名古屋圏を含む）は、学院にとって重要なステークホルダーであることを意識し、社会的責任を果たすとともに、積極的な働きかけで交流を活発化し「共生」をめざす。

1. 環境共生モデル地区の造成

- (1) 里山と大学キャンパスの共存 【前】
大学キャンパスの里山化計画を推進し、環境に配慮した施設・設備を整えるとともに、里山の価値を知り、里山を育てる行動を通して幼・中・高を含めた環境教育を行う。

- (2) 八竜地区の活用 【後】
希少な湿地植物が残る八竜地区は、学院にとっても地域にとっても大切な財産であることを周知徹底し、保全・整備を行い、環境教育のために資する。

2. キャンパスの地域への開放

- (1) 見せる施設・利用できる設備の活用 【後】
地域の人々や受験生、マスコミ、企業関係者などに学院の歴史や教育、研究、活動などを紹介できる施設、地域の人々が利用でき、教員・学生・生徒・園児と交流できる施設・設備を整え、活用する。

- (2) ランドルフ記念講堂ほか、施設・設備の利用法の見直し 【前】
講堂について、より有効かつ積極的な活用を求め、多目的ホールとしての使い勝手の良さを研究し、リニューアルと利用促進活動を行う。また、大学体育館やテニスコート等の地域開放なども検討する。

3. 人財の派遣・提供

- (1) ファッション工房の立上げ・サテライト設置構想の調査・研究 【前】
高齢者や障がい者用の衣服提案を行うファッション工房の立ち上げを期して、今後その運営の円滑化を図る。また、サテライト設置構想の調査・研究を通し、有能な人財の活用と社会への貢献をめざす。

- (2) 社会人教育・生涯教育などの諸提携・協力実態の調査・検討 【全】
生涯教育のプラン作り、社会人教育等エクステンションプログラムに関する現状、関係機関との提携・協力に関する実態を調査し、サテライトキャンパスの開設も含め学院教育の多様化・広域化を検討する。

- (3) 地域ボランティア活動への参画 【全】
学生・生徒はもとより、教職員による地域ボランティア活動についても、参加協力しやすい環境を整え、積極的な参画を推進する。

VI 金城学院創立120周年・大学設立60周年事業の実施

この記念すべき時にあたり、全員で学院の歴史と先人の労苦を振り返り、感謝の念で各種記念行事を行うとともに、10年先、20年先の将来を見据えた事業展開を行う。（詳細は p.244 ～ p.249 参照）

1. 記念式典・事業の計画・実施

金城学院の真の創立者である神様を礼拝する記念礼拝を中心とした記念式典を挙行する。その中で学院および各校の将来計画を発表する。

記念事業を学院全体のものとするために、計画するにあたって学院のすべての構成員から企画を募集した。事業計画は2008年5月の定期理事会の承認を経て準備を開始し、本年4月から実施している。

2. 至近10年間の歴史の編纂

最近10年間の歴史を記述した『Double Jubilee 120/60』（本誌）を刊行する。あわせて120年の歴史映像、卒業生などへのインタビュー、現在の金城学院の映像などで構成するDVDを制作する。また、大学W9号館には歴史的写真を展示し、学生が金城学院の歴史を知るきっかけとする。

3. 金城学院同窓会の組織強化

「みどり野会」の組織拡大・強化について、学院としても名簿の整理、入会促進、広報面などで連携と協力を積極的に行う。

4. 金城学院後援会（金城フェロークシッ）の組織化

「父母の会」を発展拡大し、周辺企業などに対して賛助会員としての参加も求め、教育支援、研究支援を行う後援会組織を確立する。

5. 記念募金

創立120周年・大学設立60周年の記念募金を、周年記念事業でもある「森の中の大学」「中学校礼拝堂・同窓会館建築」をテーマとした「教育研究振興資金」として発展させ、継続的に募金活動を行う。